
恋の中で

志野雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の中で

【Nコード】

N9942C

【作者名】

志野雪

【あらすじ】

中学校生活が始まったばかりの黒田のぞみ。学校の生徒玄関で拾った31点のテストが全ての始まりでした。

始まりはテストから

中学に入学した頃の私はまだ何も知らない、女の子でした。

「この中学校、おっきいなあ」

これが、中学校に対する私の第一印象でした。

初めの頃は戸惑っていた私もしだいに友達が出来はじめ、学校生活を楽しいものにしていきました

中学校っていろんな人がいる。授業中へいきで寝てる人もいれば、いつも怒られっぱなしの人。それから今まで見た事もないカッコイイ人や可愛い人。

入学して半分が

過ぎた頃、

「ねえねえ、のぞみちゃんはどう明

後日の郊外学習の準備した？」

前の席の川田まゆちゃんが話かけてきた。

「したよ。私、準備とか遅いから早めについて思ってたさ」

「偉いなあゝあたし、こういうの嫌なんだよね」

どうもまゆちゃんは郊外学習が嫌らしい。

私もどちらかというと みんなで盛り上がるみたいな感じのイベントはあまり好きじゃなかった

その日の帰りだった。私は早めに帰ろうと思いスクールバックを持ち、生徒玄関にいった。靴箱から靴をとり、外靴にはきかえている時、ふと、玄関の地面に落ちているグシャグシャに丸められた紙をみつけた。

「(なんだろ…)」

私は紙を拾い、その丸められた紙を見た。

そのクシャクシャな紙を広げると、『1年4組 西沢 淳 3
1点』

「(テ、テスト…!?! しかも、31点…。見ちゃマズかったかな…)」

あたふた焦っていると、「お前、それ何?」

「えっ!?!」

急に後ろから声を掛けられ後ろを振り返るとそこには野球のユニフォームを着た武蔵野和がいた。小学校から一緒に成績もほどほど良くて、運動神経も良い。

「えっ? いや、これは…」

「なんだよ。ラブレター? クシャクシャだけど」

「そんなわけないよっ」「じゃ、それ何？」

武蔵野は興味津々にのぞみの顔をみる。

「（これを見せたら、この『西沢くん』がかわいそうだよっ…。こんな点数だしっ！だけど同じ男子なら武蔵野くんに見せても大丈夫なんじゃ…？）」「のぞみは

真剣に考えた。考えてくうちに顔が熱くなってきたのが分かる。

「お前熱でもあんの？」

「（い、いや、駄

目っ！駄目よっ！こんな点数、私だったら他の人には見せられないもんっ！）」

「お、おい…黒田？」

のぞみは顔を真っ赤にしながらか叫んだ。

「西沢くんのテストは私が守るからっ！！」

「は？」

武蔵野は目を丸くした。黒田のぞみはハアハアと息を切らしている。

「え？俺が何かした？」

ひょっこり現れたのは

テスト31点の西沢淳だった。

「西沢くんっ！」

のぞみはその31点のテストを西沢の胸に押しつけた。その時ものぞみの顔は真っ赤で下を向いていた。

西沢が「これ何？」と言う前に、のぞみは

「だっ、大丈夫！他の人には見せてないからっ！っ、次頑張ればいいんだし気、落とさないでねっ」

そう言い残し、のぞみは片っぱ内ズックなのを忘れて走って学校を

でていった。

「んで、お前それ何？」武蔵野が西沢に聞く。

「え？ああ、そういえばまだ見てねえ。」

西沢が黒田のぞみから渡された紙を見る。

「げっ!？」

その紙を見た西沢は固まってしまった。

「なんだったんだよ？」武蔵野は紙を覗きこみ、 「……………」

武蔵野は西沢の肩をポンと叩いた。

「…ドンマイ…西沢…」

西沢は放心状態でフラフラしながら教室に戻っていった。

始まりはテストから（後書き）

小説って難しいですね。どうか評価をよろしくお願いします。

気まずい時間（前書き）

初心者。初めてです。よろしく願います。

気まずい時間

「はぁー」

教室で1人ため息をつく少年がいた。

少年の名前は西沢淳。今日の彼は超憂鬱。だが、その理由は分からない。

まだ誰も来ていない教室。なぜこんなに早く来てしまったんだろうと思う。

「はぁー」

もう一回大きなため息をついた。

……。

昨日見られたあの最低最悪31点のテスト…。

あのテストの点数だけでも最悪なのに、

よりにもよって黒田さんに見られるなんて…。

肘を机について窓側の前の方にある黒田の席をみる。

「やっぱりバカな奴って嫌いかな……。なんで俺こんなバカなんだろうー」

西沢は自分の机に顔を伏せた。なんだかまだ寝たりない気がした。

すると自分の後ろの方からガラガラっと音がする。誰かが教室に入ってきたようだ。だが西沢には挨拶をする気力もなかった。そいつは俺の横を通り過ぎ自分の席に着いたようだった。

（憂鬱だな）

俺はそんな事を思いながら顔をあげた。

そしてもう一度黒田の席を見る。

ガタっ！

イスから落ちそうになった。

そこには黒田が自分の席に座っていたのだ。

俺はもう一度顔を机に伏せた。

（ま、幻か！？）

そしてゆっくりと顔をあげ、慎重に黒田の席をみる…。

（やっぱりいるし！）

俺は戸惑った。昨日のテストの事、『拾ってくれてありがとう』と言うべきだろうか。それとも『今回は調子悪くて、本領発揮できなかったぜ』と『俺はバカじゃないアピール』をするべきだろうか。

（うおおおおー！！！）

俺は頭を抱え込んで天井を向いていた。

（神様ー！俺はどうすればいいんですかー！）

チラッと黒田の方を見る。どうやら鞆から教科書を出しているらしい。

俺は顔を机に伏せた。

俺、昨日話したの初めてだったのに…。しかも話した内容がテスト

（しかも31点の）ってあり…？

い、いや待てよ。今この教室には俺と黒田さんしかいないわけだし。

……………！！

机に伏せていた頭が無意識にガバツと起きる。

こ、これは絶好のチャンスじゃん！！昨日の嫌な印象（テストで31点しかとれないバカ）を挽回する絶好の機会！！

幸い誰かが教室に来る気配もない。

（よっし！）

俺は軽く自分の顔を叩いた。

ごくりと唾をのむ。

「……………。」

やっぱり好きな人に話しかけるのって緊張すんな…。

黒田さん、全然後ろ向かないし。

……………。

（あゝ俺にはやっぱり無理なんですかゝ神様あ）

西沢はまもなくして諦めたように力なく机に倒れた。

俺、超ラッキー？

神様どうか助けて下さい

（なぜ、なぜ私にこんな仕打ちをするのですか）

スクールバックから教科書やらノートを取り出しながら私は祈った。

（いつもは、こんな早い時間にいないのにな…）

廊下側の一番後ろの席。私はその西沢君のテストを（31点）見てしまった。

（き、気まずい…）

チラッと後ろにいる西沢君の席を見る。何やら彼は頭をかかえて唸っているようだ。

（こ、こわっ！）

私は前を向いて、机に教科書を入れる作業を再開する。

（は、はやく誰かこないかな…）

そわそわしながら時計を見る。皆が登校してくるにはまだ時間がある。

（このままじゃ居づらいし、教室出てトイレにいこつと）

そう思って立とうと思った時だった。

「黒田さんっ」

体が硬直した。

ゆっくりと顔を上げると、そこにはやはり西沢君がいた。

「な、何？どうしたの？」

（やっぱりテストの事だよね。）

「えっと、あの、昨日、テ、テスト…。や、やっぱりテストの点数、見たよね…？」

ポケットに手をつ突っ込みながら恥ずかしそうに笑う。

「う、うん。誰のか分かんなかったから。点数まで見るつもりはなかったんだけど…。ごめんねっ。」

「いいいや。悪いのは俺の方だし。むしろ、拾ってくれた黒田さんに感謝だよっ」

（テスト拾ってくれなきゃ、話すことも出来なかったと思うし）

「…そっか。よかった。」

彼女は安心したようにため息をついた。

「俺ってバカだから、授業さっぱり何だよね」

「じゃあ私が教えてあげるよ。教えられる範囲でだけど。」

彼女は優しく微笑んだ。

（か、かわいい）

俺はニヤけるのを必死でこらえて時計を見た。

（よし。まだクラスのやつら来る時間じゃねえな！ラッキー！）

「う、うん。じゃ頼むな。今教科書持ってくるっ！」

俺は急いで自分の机に行き、中から数学の教科書とノートを取り出した。

（俺、今日超ラッキー！？）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9942c/>

恋の中で

2011年1月21日16時08分発行